

V 今後の課題

所沢センター教務課の常勤講師全員と非常勤講師の一部が参加して進められたカリキュラム開発の結果は、目に見える成果だけを見ても実に膨大な量のプロダクトとなった。所沢センターのカリキュラムの新たなモデル作りということに関しても、まだ不十分な点が多く残るにしろ、大枠は形作られた。はっきりと目には見えない成果のうち、特に強く実感できると思われることは、所沢センターの日々の業務の中の多様なことがらがカリキュラムという概念のもとに関連づけてとらえられるようになってきたこと、しかもそれが教務課全体の傾向であることであろう。

しかし同時に、理論的な検討や調査が不十分であいまいな点を多く残したままプロダクを産み出し続けたことからくる疲労感や消化不良の感も、プロジェクトに参加してきた者が共有する感覚であろう。また、カリキュラム開発のいろいろなレベルの作業を同時並行的に進めざるを得なかったことにより、プロダクトの生産という面から見れば、結果的に回り道をしてしまったり、労力や時間の無駄を生んでしまったりもした。このことにより達成感を得にくいプロジェクトもあった。これらは、現場で日常業務に追われながら進められるプロジェクトに宿命的部分もあるにせよ、理論的な検討と実践とのバランス、物として現れるプロダクトの量と参加者自身の成長感・達成感とのバランスの調整により改善できることでもあろう。

カリキュラム開発を継続的に進めるためには、現場の講師の主体的な参加が不可欠である。カリキュラム開発のプロジェクトが参加した講師自らの成長の実感を生み、それが全体の活性化につながらなければならない。しかし、この調査研究では、プロジェクト参加者の意識の変化や成長と組織・ネットワークの在り方との関係について、十分に調査し資料を集めることができなかった。上述した内容は、実際にカリキュラム開発をともに進めることによって、その過程で生ずる感情・感覚として各人が自ら体験したにとどまる。

これらのほかにも、学習者の多様性に対する対応とカリキュラムの関係についてや、学習者のカリキュラム編成への参加の在り方等、課題は限りなく残されている。しかし、何よりも改革の継続性を保証するようなカリキュラム開発の在り方について、今後も研究を続け、これを確立することが最大の課題である。